

スーパー歌舞伎 視聴覚のメッセージ

板東浩

スーパー歌舞伎「新・三国志 Ⅲ 完結篇」を、新橋演舞場で観ることができた。私は以前からスーパー歌舞伎の大ファンの一人。第一作品の「ヤマトタケル」からずっと、市川猿之助の舞台を楽しみにしてきた。このたびは残念ながら体調を崩され、代役を務めたのが市川段治郎。なかなか頼もしく、今後の成長が楽しみだ。

三国志は奈良時代にすでに日本に輸入され、関羽^{かんう}信仰などが室町時代から存在したとされる。義理や人情、忠誠という概念が本邦と共通し、古くから歌舞伎の題材にも用いられた。その一つが日本武士を描いた「関羽^{かんう}」という当たり狂言。これを含む十八種の得意狂言が市川家に伝わり、十八番^{おはこ}という表現はこれに由来しているという。

この舞台で目を見張るのが、中国京劇陣による超絶技巧アクロバットの大立廻り。戦闘の場面での宙返りや、巨大な瀑布などの大掛かりの演出が続く。壮大で華やかな一面、根底を流れているのは人間愛だ。叙事と叙情が融合したストーリーで、目指すのは「戦無き世の到来」。戦乱の世で、主人公が何度か呟く。「信ずれば夢は叶う」と。

演劇に必須のアイテムは音楽で、本劇にふさわしい楽器として登場するのが「琴」。ポロロンと奏でて謡えば、傷ついた心も癒される。筆者は音楽家でもあり、このたびの舞台の音楽について、やや詳細に分析してみた。

テーマミュージックは、「長相思^{オウシヤクシ}」である。

♪遠く離れてはいても 心はひとつ／愛も憎しみも溶けて 心はひとつ／
あなたが見上げる星が 私を照らし／万里離れて呼び合う たましい愛し／♪……

この歌詞が、中国風の音階を基本とした旋律に、ぴったり融合している。

拍子がとても興味深い。テーマ曲が歌われるときには、通常のリズムで八拍を十回繰り返す。心地よく心に染み入り、観客の身体もゆったりと揺らぐ。しかし、同じ曲をBGMで用いる場合は、異なるのだ。演出の邪魔にならない音量で、八拍×十ではなく、九拍×六と七拍×四となる。ただし、この変拍子を通常の人に気づかせないところがミソ。心憎いテクニク。半端な拍数により、何となく異国情緒を醸し出す。料理では隠し味に相当するのだろうか。無意識のレベルに働きかけるサブリミナル効果のようだ。

調性にも工夫がみられた。中国音楽では、用いる楽器の特性によって、楽譜は通常ハ長調やイ短調など#やbがつかない場合が多い。テーマ曲を琴で奏するときには、イ短調となる。ところが、センチメンタルで悲しい場面では、同じ曲でも半音下げてト短調（bが二つ）でしっとりとした音色で、優美で楽しい雰囲気^{きんぐい}のシーンでは変ハ長調とハ短調（bが三つ）で快活な器楽演奏がなされていた。

もし、私がこの音楽の担当者だったと仮定しても、同様な調性を用いたと思う。というのは、音楽家は研鑽を積むプロセスで、曲の調性とイメージとの関係を次第に認識してくるからである。たとえば、ハ長調：勇氣、ト長調：勝利、ヘ長調：平和、田園、ヘ短調：悲しみ、ハ短調：祈り、などの傾向が知られているのだ。通常、一般人には絶対音感がなく、微妙な音程の違いが認識されないだろう。しかし、長年にわたり、数多くの楽曲を聴取していると、これらのイメージを無意識のレベルで感じられるかもしれない。

なお、歌舞伎では、人物描写に色を利用している。紅隈^{べにくま}はパワー溢れる人物を、藍隈^{あいぐま}は邪悪や亡霊を、茶が基調の代謝隈^{たいたくま}は邪悪な適役を表す。今回のスーパー歌舞伎では、物語に加えて、視覚の演出や聴覚の効果を融合させ、潜在意識に働きかけることで、豊かなメッセージやイメージを伝えているような気がする。

(徳島大学生体情報内科学)